

鹿児島大学入学生の運動・スポーツの実施状況と実施阻害要因 および実施意欲に関する研究

教育学部 准教授 福満 博隆、教授 末吉 靖宏、教授 飯干 明、
准教授 石走 知子、教授 橋口 知、教授 長岡 良治

I 目的

鹿児島大学新共通教育課程において体育・健康科目は、「人間力」の基本要素の1つとして位置づけられた「身体力」の能力を養成する役割を担っている。その中で、必修科目になっている体育・健康科学実習Ⅰでは、生涯にわたって健康で豊かな生活を営むための基礎的知識と身体運動を実践していく習慣を身につけることを目指しており、そのためには、今日の学生の実情を把握し、今後の課題を明らかにしていく必要があると思われる。

昨年行った入学生の学部ごとの運動・スポーツの実施状況と体力測定と比較研究（福満ら2013）において、入学生の運動・スポーツの実施状況の調査結果では、日常的に運動を実施していない学生が男女とも体育・健康科学実習Ⅰを後期に受講している理学部、工学部、水産学部によくみられた。

しかしながら、後期に受講している学部にならざるに日常的な運動不足傾向がみられた理由までは分かっていない。入学して半年が経ち学生生活に慣れ、一定の生活スタイルに落ち着くと思われる後期に受講する学生の運動・スポーツの実施状況と実施阻害要因を分析し、また一方で、同授業が学生の運動・スポーツの実施意欲に及ぼす影響を分析し、本学の学生の実態を明らかにすることは意義があると考えられる。

そこで本研究では、体育・健康科学実習Ⅰを後期に受講する学部の運動・スポーツの実施状況を前期に受講する学部と比較してその傾向を確認するとともに、実施阻害要因を明らかにし、また同授業が実施意欲に及ぼす影響を明らかにすることで、学生の実情を把握し、今後の体育・健康科目の授業の充実に資するための示唆を得ることを目的とした。

II 研究方法

1. 調査対象と調査項目

調査は、平成25年度鹿児島大学の共通教育科目体育・健康科学実習Ⅰ（必修科目）を後期に受講した理学部、工学部、水産学部1年生を対象に、運動・スポーツの実施に関する実施状況（頻度）と実施阻害要因および実施意欲（授業の影響度）の3項目を調査した。なお、運動・スポーツの実施に関する実施状況調査では、前期に同科目を受講した法文学部と農学部の学生を比較対象として調査した。

2. 調査期間と対象人数

(1)実施状況調査項目は、体育・健康科学実習Ⅰの授業において提出された（提出期間は、平成25年度前期5月～7月、後期11月～1月である）レポートの中にある質問項目を抽出して18歳と19歳の男子651名、女子277名、合計928名を分析した。（理学部：男子98名、女子39名、計137名、工学部：男子269名、女子60名、計329名、水産学部：男子78名、女子24名、計102名、法文学部：男子150名、女子117名、計267名、農学部：男子56名、女子37名、計93名）

(2)実施阻害要因と実施意欲の調査は、同授業の最終回にアンケートを実施して、18歳から20歳の男子469名、女子128名、合計597名を分析した。（理学部：男子59名、女子41名、計100名、工学部：男子338名、女子62名、計400名、水産学部：男子72名、女子25名、計97名）

III 分析方法

運動・スポーツの実施状況（頻度）調査項目は、男子学生と女子学生を分けて、学部別にクロス集計を実施し、平成24年度の結果と比較検討し考察を重ねた。また、実施阻害要因と実施意欲（授業の影響

度)の調査項目は、男女別にクロス集計を実施して考察を重ねた。統計処理には統計解析用プログラムSPSS statistics 19を用い、クロス集計にはカイ2乗検定を行った。

Ⅳ 結果・考察

1. 学部別にみた運動・スポーツの実施状況(頻度)について

平成25年度の学部別男子学生の運動実施状況をみると(表1-1)、運動をしない及びときたま(月1~3日程度)実施している運動量の少ない学生は、工学部が56.1%、水産学部が50.0%、理学部が48.0%の順で多くみられ、対象群の法文学部(42.7%)と農学部(21.4%)と比較すると後期に受講している学部生の方が日常的に運動不足であることが推察される。これは、平成24年度の学部別男子学生の運動実施状況にみられた水産学部(55.7%)、工学部(50.4%)、理学部(48.0%)の運動量の少ない学生の割合と比較すると、同様の傾向がみられた。また、平成25年度の学部別女子学生の運動実施状況をみると(表2-1)、運動をしない及びときたま(月1~3日程度)実施している運動量の少ない学生は、理学部が77.0%、工学部が76.6%、水産学部が62.5%の順で多くみられ、対象群の法文学部(71.8%)と農学部(54.0%)と比較すると後期に受講している学部生の方が日常的に運動不足の傾向が若干みられる。これも平成24年度の学部別女子学生の運動実施状況にみられた理学部(86.7%)、水産学部(73.4%)、工学部(71.5%)の運動量の少ない学生の割合と比較すると、同様の傾向がみられた。このことから、男女とも後期に体育・健康科学実習Ⅰを受講している理学部、工学部、水産学部では、日常的な運動不足の学生が多いことが推察され、後期に入って大学生活に慣れる一方で、運動不足の生活に陥る学生が多いことを示していると考えられる。

表1-1 学部別男子学生の運動・スポーツ実施状況(頻度) (%)

	前期受講学部		後期受講学部			合計
	法文学部	農学部	理学部	工学部	水産学部	
ほとんど毎日	10.7	17.9	9.2	12.3	19.2	12.7
ときどき	46.7	60.7	42.9	31.6	30.8	39.2
ときたま	26.7	19.6	23.5	35.3	34.6	30.1
しない	16.0	1.8	24.5	20.8	15.4	18.0
	100	100	100	100	100	100
	N=150	N=56	N=98	N=269	N=78	N=651

P<0.001

表1-2 学部別女子学生の運動・スポーツ実施状況(頻度) (%)

	前期受講学部		後期受講学部			合計
	法文学部	農学部	理学部	工学部	水産学部	
ほとんど毎日	6.0	16.2	7.7	3.3	20.8	8.3
ときどき	22.2	29.7	15.4	20.0	16.7	21.3
ときたま	34.2	21.6	38.5	38.3	16.7	32.5
しない	37.6	32.4	38.5	38.3	45.8	37.9
	100	100	100	100	100	100
	N=117	N=37	N=39	N=60	N=24	N=277

有意差なし

2. 運動・スポーツの実施阻害要因について

日常的な運動・スポーツを続けるのに妨げになっていることは何ですかという質問(複数回答可)に対して全体でみると(表2)、「アルバイトが忙しい」が37.5%で最も多く、「続ける場所がない」が35.8%、「サークル等の活動が忙しい」が27.1%、「続ける気力がない」が25.0%の順で多くみられ、「続ける必要性を感じない」が3.4%で最も少なかった。男女別の「続ける仲間がいない」では、有意差が見られ(P<0.05)、男子(12.2%)よりも女子(19.5%)の方が多くみられた。このことから、大学生活に慣れる一方で、運動不足の生活に陥る要因として、アルバイトやサークル等の活動が忙しく運動・スポーツを実施する時間が取れないことや続ける気力がないことが推察される。また、運動系のサークル等に所属していない学生にとって、気軽に運動・スポーツが実施できる施設等がないという環境的な問題も推察される。女子学生は、男子学生よりも一緒に運動をする仲間を求める傾向がある事が推察される。一方で、「続ける必要性を感じない」

表2 男女別運動・スポーツ実施阻害要因 (%)

	男子	女子	合計	
	N=469	N=128	N=597	
サークル等の活動が忙しい	26.9	28.1	27.1	n.s.
アルバイトが忙しい	35.4	43.0	37.0	n.s.
続ける場所がない	33.9	43.0	35.8	n.s.
続ける仲間がいない	12.2	19.5	13.7	※
続ける気力がない	25.4	23.4	25.0	n.s.
続ける必要性を感じない	3.8	1.6	3.4	n.s.
続けることが面倒くさい	14.9	15.6	15.1	n.s.
運動をすることが嫌い	4.3	5.5	4.5	n.s.
その他	3.8	6.3	4.4	n.s.

※ P<0.05

Ⅲ 研究論文

という学生が少ないことは、体育・健康科学実習Ⅰの授業を通して、日常的な運動・スポーツを実施する必要性を理解したことに起因すると考えられる。

3. 運動・スポーツの実施意欲（授業の影響度）について

体育・健康科学実習Ⅰの授業を受けて、日常的に運動・スポーツを続けてみようという気持ちになりましたかという質問に対して全体でみると（表3）、「週1～2日程度続けてみよう」が50.3%で最も多く、「週3日以上続けてみよう」が23.6%、「月1～3日程度続けてみよう」が19.3%の順で多くみられ、「続けようと思わなかった」が6.9%で最も少なかった。男女別では、有意差が見られた（ $P<0.01$ ）。「週3日以上続けてみよう」では、女子学生（14.1%）より男子学生（26.2%）が多く、「月1～3日程度続けてみよう」では、男子学生（17.1%）より女子学生（27.3%）が多かった。7割以上の学生が日常的な運動・スポーツの実施に対する意欲を示したことから、体育・健康科学実習Ⅰの授業内容が、学生の実施意欲に影響したと推察される。特に女子学生より男子学生の方が影響を強く受け、意欲の高い学生が多い傾向があると推察される。

表3 男女別運動・スポーツ実施意欲(授業の影響度) (%)

	男子	女子	合計
週3日以上続けてみよう	26.2	14.1	23.6
週1～2日程度続けてみよう	49.5	53.1	50.3
月1～3日程度続けてみよう	17.1	27.3	19.3
続けようと思わなかった	7.2	5.5	6.9
	100	100	100
	N=469	N=128	N=597

$P<0.01$

V まとめ

本研究では、体育・健康科学実習Ⅰを後期に受講する学部の運動・スポーツの実施状況を確認するとともに、実施阻害要因を明らかにし、また同授業が実施意欲に及ぼす影響を明らかにすることで、学生の実情を把握し、今後の体育・健康科目の授業の充実を図るための示唆を得ることを目的とした。その結果、男女とも後期に体育・健康科学実習Ⅰを受講している学部では、日常的な運動不足の学生が多く、後期に入って大学生活に慣れる一方で、運動不足の生活に陥る学生が多いことが推察された。運動不足の生活に陥る要因としては、アルバイトやサークル等の活動が忙しく運動・スポーツを実施する時間が取れないことや続ける気力がないことが挙げられ、また、運動系のサークル等に所属していない学生にとって、気軽に運動・スポーツが実施できる施設等がないという環境的な問題があることも推察された。一方で、体育・健康科学実習Ⅰの授業を通して、多くの学生が日常的な運動・スポーツの実施に対する意欲を示しており、特に女子学生より男子学生の方が影響を強く受け、意欲の高い学生が多い傾向があると推察された。したがって、身体運動を実践していく習慣を身につけることの必要性を学び、運動・スポーツの実施意欲が芽生えながらも日常的な運動実施に繋がらない学生の実情を踏まえ、今後も学生が運動実施を継続する力を身につけられるような働きかけが必要であると考えられる。課題として、より日常生活に取り込みやすく、運動効果が高まるような運動・スポーツの実施内容や実施方法について検討し、授業の中で取り扱っていく必要があると思われる。

参考文献

- 1) 門 久義 (2012) 進取の精神をもった学士の養成を目指す共通教育改革について、鹿児島大学教育センター年報、第9号、3-6.
- 2) 福満博隆、末吉靖宏、飯干 明、石走知子、橋口 知、長岡良治、徳田修司 (2013) 鹿児島大学入学生の学部ごとの運動・スポーツの実施状況と体力測定の結果について、鹿児島大学教育センター年報、第10号、28-32.